シンポジウム 「駅　広場ルネッサンス２００５in かなざわ」の報告
～ 金沢から駅　広場とまちづくりの未来を発信する ～

2005 年 6 月 10 日　会場　金沢市アートホール（ポルテ金沢 6F）

今年の３月２０日に金沢駅東広場がようやく完成した。この金沢東広場の計画は平成６年に設置された整備懇話会、専門委員会までさかのぼることができ、その間プロデユーサー会議や各種の研究会、検討会などでの数々の議論を経て、ようやく先日（平成１０年３月の本格着工から７年の歳月をかけて）完成を迎えた。この駅は金沢の表玄関であり、２１世紀における「金沢世界都市構想」を具現化するための情報・文化の発信拠点でもある。

どこの都市においても駅前広場は都市の顔であり、人々の交流の場（交流空間）である。単に交通処理を行うだけではなく、まちのイメージを高めるシンボル的役割をも担っている。

金沢市では、金沢駅東広場（写真－１）の完成を契機に、駅前広場の持つ役割を幅広い視点から議論し、駅前広場を中心とした都市空間「駅　広場」と「まちづくり」の関係、特に未来へ向けての駅前広場の役割を考えることを目的に、(社) 日本都市計画学会中部支部の共催を得て、下記のようなシンポジウムを開催した。シンポジウムには、約 250 名以上の参加者があり、活発な議論が行われた。

写真－1　金沢駅東広場（提供：金沢市）

1．基調講演（I）では、土井　勉先生（神戸国際大学教授）に「まちづくりと駅　広場の役割」と題して講演をしていただいた。

2．基調講演（II）では、清水喜代志氏（国土交通省街路事業調整官）に「わが国における交通結節点整備の動向」と題して講演をしていただいた。**また、地元金沢市（遠藤玲技監）からは、これまでの金沢駅東広場の整備状況について、報告**（「金沢駅東広場と都心軸の活性化」）があった。

シンポジウムの後半では、**水野一郎先生（金沢工業大学環境・建築学部長）をコーディネーターとして、パネルディスカッション「21世紀の駅　広場とまちづくりのありかたを考える（～人々の交流と賑わい創出の拠点をめざして～）、パネリスト（丹羽麻里、伊澤知旦、半田隆彦、荒永秀俊、高山純一）、アドバイザー（土井　勉、清水喜代志）」**が行われた。

写真－2　パネルディスカッション

パネルディスカッションでは、これからの駅前広場は単なる交通結節点にとどまらず、都市の個性を示すシンボルであり、人々が憩い、賑わいを生む空間であるべきであること。また、行政中心の従来の管理体制を見直し、行政と市民が一体となって管理運営していく体制作りが必要であること。さらに、駅前広場を「駅と街を結ぶ縁側」と位置づけ、公共交通機関の利用促進を進めるとともに、来外者を街中へいざなう演出ともてなしの心の育成が大事であることなどが提案された。そして、金沢の街は中世から現代に至る建築物が重層的に残る街であり、駅東広場もそれにふさわしい風格と品を備える事が大切であるが、北陸新幹線の金沢開業を視野に駅周辺の活性策が大きなポイントとなるとの問題提起もなされた。

(文責：高山純一(金沢大学))